

茶の湯体験学習（全般） 事前・事後学習教材

1. 抹茶とはどんな味、どんな風に飲むもの？

緑色のお茶の粉

作法、約束がある...日本独特の伝統・文化であり茶道とも言う。対比: 武道(剣道、柔道...)

お手前、お茶を点てる(入れる)、一服(一杯)、「お服加減はいかがですか」

道具...茶筌、茶杓、茶器・棗、袱紗、水指、釜、柄杓、床の間の掛け軸、懐紙など

いただき方...礼:「お相伴いたします」「おさきに頂戴いたします」「お点前頂戴します」

お茶碗をまわして、正面をさけていただき、飲みきったらまた、回して元に戻す

2. 海外での人気、関心の強さ

日本の伝統・文化、奥にある心を知り、伝えられてこそ、国際人、お互いの文化・伝統を尊重しあってこそ真の国際化につながる。

3. お茶の歴史

茶の湯の始まり

1. 平安時代の末、栄西が中国(宋の時代)に渡り、質のよいお茶を持ち帰った。
飲んで楽しむだけでなく、病気にもきく薬として、将軍 源実朝に献上。
健康回復のための薬として飲まれるようになった。→お茶を一服
2. 足利時代、武家や商人の間にもお茶を飲む風習がひろがっていく。
ぜいたく、はなやか→簡素で落ち着いた草庵の茶法を楽しむようになる。
広い部屋→四畳半のわび茶 村田瑞光の理想を武野紹鷗が始める
3. 千利休(1522～1591)がわび茶の完成
田中与四郎 堺の大商人の家に生まれる。祖父、田中千阿弥(せあみ)
4. 利休の次男が千家を継ぐ。その子、つまり利休の孫が千宗旦
表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が生まれた。
利休から数えて15代の千玄室、16代の宗室は平成14年に継いで家元に。

4. 茶の心「和敬清寂」

茶道の一番大切なことが「四規」としてまとめられている。

「和」...お互いに心を開いて仲良くすること

「敬」...お互いに敬いあうという意味

「清」...目に見えるものだけでなく、心にもごりがない清らかな状態

「寂」...どんなときにも動じない心

5. 利休七則(りきゅうしちそく)

茶は服のよきように点て、炭は湯の沸くように置き、花は野の花のように生け、冬は暖かに夏は涼しく、刻限は早めに、降らずとも雨の用意、相容に心せよ。

6. 一期一会

お茶を点てる人、いただく人が、お互いの気持ちを大切にして、その一時を過ごす。

今日の出会いは、二度とない機会であるという真剣な気持ちで茶会にのぞむ。

<本教材は、堺市立浜寺小学校で実際に使われた教材をご提供いただきました>

茶の湯体験学習（全般） 事前・事後学習テキスト

茶の湯体験学習で学んだことについて、もう一度考えてみましょう。
() には、ことばを入れましょう。

1. 抹茶とはどんな味、どんな風に飲むもの？

作法、約束がある...日本独特の伝統・文化であり()道とも言う。

お手前、お茶を点てる、一服のお茶、「お服加減はいかがですか」

お道具...茶釜、茶杓、茶器・棗、袱紗、水指、釜、柄杓、床の間の掛け軸、懐紙など

2. 海外での人気、関心の強さ

日本の伝統・文化、奥にある心を知り、伝えられてこそ、国際人、お互いの文化・伝統を尊重しあってこそ真の国際化につながる。

3. お茶の歴史

茶の湯の始まり

1. 平安時代の末、栄西が()を()から持ち帰る

2. 足利時代、武家や商人に広がる。

3. ()は、わび茶を完成した人

本名を田中与四郎といい、堺の大商人の家に生まれる。

田中千阿弥は祖父。

4. 三千家(「 」 「 」 「 」)となる。

4. 茶の心

茶道の一番大切なことが「四規」としてまとめられている。

「 」...お互いに心を開いて仲良くすること

「 」...お互いに敬いあうという意味

「 」...目に見えるものだけでなく、心もにごりがない清らかな状態

「 」...どんなときにも動じない心

5. 利休七則（りきゅうしちそく）

()は服のよきように点て、()は湯の沸くように置き、()は野の花の
ように生け、冬は()に夏は()、刻限は()、降らずとも
()の用意、相客に心せよ。

6. 一期一会

お茶を点てる人、いただく人が、お互いの気持ちを大切にして、その一時を過ごす。

今日の出会いは、二度とない機会であるという真剣な気持で茶会にのぞむ。

<本教材は、堺市立浜寺小学校で実際に使われた教材をご提供いただきました>